

近世ベトナムの家族・親族と「儒教化」

—ベトナム家譜から見る儒教化と村落・ジェンダー秩序—

趙浩衍

本報告では、主に族譜史料の内容分析を通して、近世ベトナムの儒教化や村落・ジェンダー秩序の実態を明らかにする。小農社会の成立とそれに伴う朱子学の浸透、家族制度の変化を「近世」東アジアの特徴として理解する「東アジア近世論／小農社会論」は、従来日本／中国／朝鮮という地域的枠組みの中で展開されてきた。しかし同様の歴史的展開は、ベトナム史においても共時的に確認できる。この時代、ベトナム社会は「ルースな小人口社会」から「小農社会」へと変容し、それと平行して政治・社会的規範における「儒教化」が展開していた。しかしこのような儒教化は、朝鮮や日本と同様にローカライゼーションを伴ったものであり、ベトナム社会に合わせた儒教論理の取捨選択が行われていた。

17世紀後半、黎鄭政権は行政末端である「社 xā」を徴税単位とし、税額を定額化する一方、統治イデオロギーとして儒教を採用した。社は徴税だけではなく集会場所「亭 đình」における城隍神の祭祀、上級機関への上申や隣村との訴訟単位となり、その自律性を高めていた。人口増加と耕地拡大の頭打ちから生じた流民の進入を防ぐために、亭を中心とした祭祀集団である「甲 giáp」が村内の地縁集団として成立した。そのメンバーシップは父系血縁原理により規定され、その結果、父系血縁集団である「ゾンホ dòng họ」は「甲」の内部組織的な形で組み込まれるようになる。

ゾンホはその結束を図り村内における地位を強固にするために、祠堂の建設と共通の祖先への祭祀、族譜の編纂を行っていた。ベトナムにおいて「族譜」は「家譜 gia phả」と呼称され、その形式は日中朝とは異なる独自性を有している。その内容もまた多様で豊富であり、そのため家譜の内容を通して近世ベトナムの社会像をうかがうことができる。そこで本報告では、ベトナムの家譜に注目することで「近世」ベトナムにおける「儒教化」と「ジェンダー秩序」の実態を明らかにしようとする。